

山と博物館

第18巻 第9号 1973年9月25日 大町山岳博物館



北条屋敷の石仏

画 齊 藤 清

「文化遺産は誰れのもの」

昭和四十六年十二月、大町市教育委員会は天然記念物として、生活圏と重複して自生する南限界にあるオオヤマザクラを指定しましたが、この地域は最近スキー場の開発が進みその施設ができたり、国道のバイパス計画がたてられたりしておりますが教育委員会の知らぬ間に数本のヤマザクラはすでに切倒され十余本はバイパスを通すため風前の灯にさらされているとのことであります。ところが地域の人はバイパスはそこを通り、どの土地が潰れるかという点には深い関心をほらつて色々注文をつけたようでありますが、天然記念物に指定されたオオヤマザクラのことについては一言も話がなかったと建設事務所の係官はいつております。市教委では諸新聞を始め市広報・公民館報・市文化祭での特別展の開催等市民P・Rには万全を期したつもりでいたところ、意外に市民の関心は高まっていたことに今更おどろいたわけであります。これはヤマザクラのみではなく埋蔵文化財・史蹟・古文書・民俗資料等についてもいえることであります。口を開けば自然や文化財の保護行政の立運れを叫び、保護施設・設備の不備をとねえる少数の学者や研究者だけがいかにあせつても遅々として進まぬ現実の姿はどこにその要因があるだろうか、地域の人達に文化遺産の保護が急務であることを語れば特別な利害関係者以外は真向から反対するものはおりません。しかしこれらの人達は全て理解協力者ではありません。「私とはかわりの無いこと」と割切っているか、無関心の人が多いようであります。特に文化遺産の場合は一町内のものであったり、個人や氏子や信徒のものである例が多いため、国民、住民全ての貴重な遺産であることが忘れられているからではないでしょうか。オオヤマザクラの轍を踏むことのないよう市民一人一人が真の理解協力者になつてもらう日を期待してやみません。(大町市公民館長 下坂宜一)

北京動物園

— 出会った珍らしい動物たち —

田 辺 興 記

昨年の十月二十八日、日中国交回復を記念し、中国より世界の珍獣ジャイアントパンダが贈られて、上野動物園で預り、飼育してきました。しかし、多くの疑問や問題が生じ、中国の動物園での実際の飼育状態や、繁殖、病気にについて調べる必要にせまられました。

また、四月三日より四月十七日にかけて、ジャイアントパンダの飼育に関する調査、研究の出張の機会を得ることができ、同時に、日本よりジャイアントパンダの返礼であるニホンカモシカ、フンボルトペンギンの輸送を兼ね、日中親善の大相撲の一行と共に、中国を訪ねることができました。中国では、北京、上海の両動物園を見学することができました。すでに御存知のように、ニホンカモシカは大町山岳博物館より寄贈された太郎と辰



ウチジロジカ 雄

子です。この二頭のカモシカは、上野動物園で、一週間の検疫後、四月三日別々の飛行機で輸送されました。二頭共無事に到着し、直ちに北京動物園の検疫舎に収容され、約三ヶ月の検疫をうけ、一般公開されるとのことでした。

私たちの主目的は、北京動物園でのジャイアントパンダの飼育に関する調査であった為時間的な問題もあり、充分に他の動物を見る事ができませんでした。ここでは北京動物園の概要と、そこで出会った珍しい動物たち、特に中国産のウシ科、シカ科の動物を中心に紹介してみたいと思います。

なお、中国では二十三ヶ所の動物園があり公園の中に動物を飼育している所が六十ヶ所あるそうです。そのうち十四ヶ所の動物園でジャイアントパンダが飼育されています。

北京動物園

北京市の中心より北西の市街地のはずれにあつて、一九〇七年に開園され、広さは約五〇ヘクタール、年間利用者数は約七百万人、入園料は身長一・二メートル以上は日本円で約六円五十銭、一・二メートル以下無料、年中無休の動物園です。飼育動物数は、哺乳類、鳥類、両生爬虫類あわせて、三二五種二三二〇点で、自国産の動物を多く収集展示し、とくに偶蹄類のウシ科、シカ科のコレクションは非常に立派なものです。また、収集動物の種類、飼育繁殖技術など、世界の一流の動物園と比べ、少しも遜色のない第一級の動物園で、中国の動物園の中心的役割を果たしている所でもあります。

次に、園内見学コースに従い、出会った珍しい動物たちを紹介します。動物名は初めに中国名、ついで和名、中国産のウシ科、シカ科、ウマ科には学名をあげました。

まずはじめは小動物園で、ここには金縷猴(シシバナザル、イボハナザル、ゴールデンモンキーなどと呼ばれる)が雌雄一頭ずつおりました。このサルは薄い金色を主体とした美しい長い被毛をもつたやや大型のもので、四川(しせん)省北部、甘肅(かんすう)省東南部、陝西(せんせい)省南部に分布するものです。かつて中国より一度も外国へ出たことのないサルで、中国ではジャイアントパンダと共に、最重要の保護動物に指定されています。

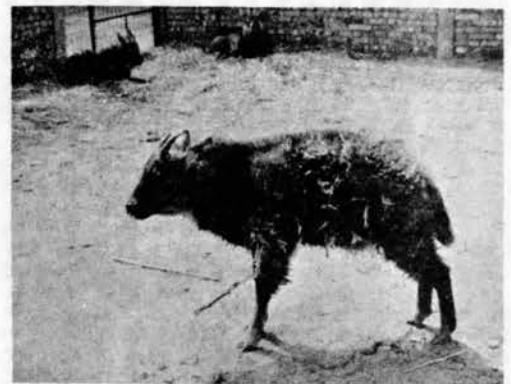
象房：いわゆるゾウ舎で、ここには中国雲南(うんなん)省産のインドゾウの亜種ウナンゾウが、雄二頭、雌一頭いました。このゾウは外観は全体的に四角形の感じがするものでした。

黒熊山：ここには馬熊(ウマクマ)というヒグマの亜種とされている淡い金緑色の長い被毛を持ったクマがおり、これは中国の青海(せいはい)省に生息していて、世界中で北京動物園にのみ飼育されていると思われるものです。

猛獣舎：ここには稀少になった雪豹(ユキヒョウ)が三頭おりました。

狼山：ここはオオカミ舎ですが、ここには中国産のオオカミの三亜種(白狼、黒狼、青狼)と紅狼(ドール)がいました。ドールはジャイアントパンダの生息地にも分布し、パングダにとつて最大の天敵といわれています。

体形は小さく、一見キツネに似ていますが、大きな群を構成し、襲う習性があるそうです。獅虎山：ライオン、トラなどの大型のネコ類を主体とした展示場で、ここにはトラの三亜種(東北虎・シベリヤトラ雄二頭雌五頭、華南虎・ベンガルトラ)以上中国産、澳門(スマトラトラ)、ヒョウの三亜種(華南豹・キンセンヒョウ、華北豹・チュウゴクヒ



ゴーラル 雄

ョウ?—以上中国産、朝鮮豹・チヨウセンヒョウ)がいました。他にはライオン、ジャガー、ハイエナなどもおりました。

猿舎：ここはマカク属のサルを主体とし、八種が同居しているサル舎です。ここには珍しい中国産の四川猿(ベニガオザルの亜種)や熊猴(アッサムモンキー)がおりました。

鹿苑：ここは動物園で最も広い敷地をもつた、ウシ科、シカ科の動物のオーブンテージです。この代表は白唇鹿(ウチジロジカ、*Cervus albirostris*)でしょう。雄一〇

頭雌三頭がおりました。このシカは大型の中国特産シカで、口の周囲が白く、体長二・一メートル、体高一・三メートル位のもので、四川省西部、西藏(ちべつと)東部などの高山地帯に生息し、最高五〇〇〇メートルの地帯にもいることがあるそうです。中国でも極めて数の少ないシカだそうです。この外に、シカ科のものは馬鹿(ウマシカ *Cervus elaphus muralis*)、甘肅馬鹿(ウマシカの亜種)梅花鹿(ニホンジカの亜種 *Cervus nippon* spp.)、日本鹿(ニホンジカ)黒鹿(スイロク)の亜種 *Cervus unicolor*、駝鹿(ヘラジカ *Ales alces*)、麝(ノロ *Capreolus capreolus*)

眼腺の無い斑羚(ゴールル *Naemorhedus korali*)もいました。ゴールルは中国では三亜種に分けられることもあり、それぞれの生息地によって多少、体色が異なるようですが、ここのは喉の下に大きな白斑があり、灰色、黒褐色をして、尾がやや長めのような感じ。雌雄とも有角でした。生息地は高山の森林や岩場で、単独ないし、三、四頭の群をつくり早朝や夕刻に、地衣、苔蘚類、果実、草木の葉や小枝を採食し、冬期に交尾し、妊娠期間六ヶ月で一仔を出産し、まれに双子になることもあるそうです。分布は中国では、東北山区、四川雲南省にかけてで、この外、ヒマラヤ、アッサム、ビルマなどです。

他に、岩羊(バラール *Pseudois nayaur*)や盤羊(アルガリ *Ovis ammon*)がおりました。バラールはヤギ族に属するもので、体長約一・一メートル、体高八〇センチメートル前後体重五〇キログラム以上になり、雌雄とも有角です。しかし、雌では雄より、ふたまわりほど小さめです。三五〇〇〜六〇〇〇メートルの高山の岩場に生息し、一〇〜五〇頭時には二〇頭位の大きな群で生活しているそうです。分布は中国では、四川、甘肅、陝西、青海の各省内蒙古、西藏などで、その外ネパール、カシミールなどに分布しています。アルガリはヤギ属の野生ヤギ中最大の種類で体長一・三メートル、一・六メートルになり体色は灰褐色で、雌雄とも有角ですが、雄ではとくに大きく発達しています。生息地は高山地帯で、十月〜十二月に交尾し、四月〜五月に出産するそうです。

羚羊・猩猩館：ここはサル類と偶蹄類の同居した展示場で、白斗叶喉(シロアタマルト)やチンパンジー、オランウータン、テナガザルなどと共に、原羚(チベットガゼル、*Procapra picticauda*)や、米国のパランダの返札のジャコウウシや、世界でも飼育例の稀な倭水牛(アノア)、ニルガイ、ブラックバックなどがおりました。このチベット

ガゼルは体長一・一メートル位で、体色は灰褐色で、雌雄とも有角の珍らしいものです。分布は西藏高原、甘肅、青海省などです。この建物の北側には、中国特産であるが、すでに野生種が絶滅し、イギリスより逆輸入された麋鹿(四不象、シフゾウ *Elaphurus cephalopus*)や毛冠鹿(マエガミシカ、*Elaphodus cephalopus*)、馴鹿(トナカイ、*Rangifer tarandus*)、赤鹿(ホエジカ、*Motacius muntjak*)などや、世界中の動物園で、たまた頭の野駱駝(ヤセイフタコブラクダ、*Camelus bactrianus ferus*)の雄おりました。マエガミシカはホエジカに体形体色などが似ていますが、全体的にやや黒が強く、前額部に黒褐色の長い毛が生えていてこれより、動物の名の由来があるようです。これも中国特産といわれ、浙江(せつこう)福建(ふっけん)、湖北(こほく)、四川などの各省に分布しています。この展示場のとなりには、西藏野驢(キャン、*Equis hemionus kansu*)が雄二頭、雌三頭がおり、これは一名、チベットノロバと呼ばれ、アジアノロバの亜種で、世界中で、中国の動物園のみ飼育されていると思われま。



バラール 手前雌、奥雄

検査舎：動物園の西端にあつて、一般の観客は、立入禁止になっています。ここには、ニホンカモシカの太郎と辰子が、別々に検査をうけていました。餌は柏に似た葉をていねいに乾燥したものを主とし、柳の新芽も与えられていました。北京動物園では、ウシ科、シカ科の動物の飼育には相当の経験があり、自信をもって飼育してまいりました。この太郎と辰子となりには、人工哺乳した麝門羚(スマトラカモシカ *Capricornis sumatraensis*)の雌二頭や麝(ジャコウジカ *Moschus moschiferus*)などがおり、検査をうけていました。このスマトラカモシカはニホンカモシカと同属で、中国では三亜種に分けることもあるそうですが、中国の図鑑には、一種のみ記載してあります。これは普通、シーローあるいはタテガミカモシカなどと呼ばれるもので、体長一・四〜一・七メートル、体高約一・一メートルになり、耳が大きく、頸背部に長毛が生えていて、雌雄とも有角で、体毛は生息地によって異なりますが、この黒が強い褐色で、タテガミ様の長毛は白色でした。生息地は高山地帯で、単独ないし数頭で生活して、中国では九月下旬〜十月に交尾して、妊娠期間は八ヶ月前後で、五〜六月に出産します。分布は中国では四川、甘肅、雲南各省などで、外には、スマトラ、マレー半島、ベトナム、ラオス、ビルマ、タイ、ネパールなどです。

鹿苑の西側には柘角羚(ターキン)や、野牦牛(ヤセイヤク、*Bos quatuordecim*)、ヨーロッパバイソン、アメリカバイソンなどがおりました。このターキンは雌二頭がスーチワンターキン (*Budorcas taxicolor tibetana*) 雌一頭がゴルデンターキン、あるいはキョウセイターキン (*B. t. bedfordi*) と思われる。これらのターキンは、シヤモア族に属するもので、体長二〇〇〜二二〇センチメートル、体高一一〇〜一二〇センチメートル、体重三〇〇〜二七〇キログラムになる大がらのがつしりとしたもので、雌雄とも有角



スーチワンターキン 雌

ですが、ともに太い扁平の特異的な角をしたもので、体色は前者が灰褐色、後者では、淡い黄色色をしています。分布は中国では、四川、陝西、甘肅各省、西藏で、この外、ブータン、ビルマ北部に分布していますが、数の極めて少ない動物です。ヤセイヤクもその数が極めて減少し、飼育下にあるのは、北京とソ連のアスカニヤノバと言われています。これは全身が黒色を主体とした長毛に被われ、長い角を有し、五〇〇メートル以上の高山地帯にすむものです。

水禽湖：これは園のほぼ中心にある大きな池で、当時は改修中で、多くの鳥類は転出していましたが、タンチョウ十二羽、マナヅル八羽や、幻のツルといわれ、中国外では写真さえもないといわれる黒頸鶴(オグロツル、*Grus nigricollis*)が三羽おりました。この外にも多くの鳥類舎があり、沢山の鳥たちがおりました。

最後に熊猫館ですが、ここはいわゆるパンダ館で、ジャイアントパンダの雄二頭、雌三頭、レッサーパンダ雄雌四頭ずつが飼育されています。このパンダについて、今回は割愛いたします。(東京都恩賜上野動物園)

